

(城西人文研究第15卷第2号)

【研究ノート】

井泉水編『一茶俳句集』入集の句(三)

黄 色 瑞 華

凡 例

- 一 一行めに、井泉水編『一茶俳句集』の本文をおく。ただし、漢字は現行文字とし、ルビは省略した。
- 二 二行めに、出典を示し、句帳・紀行などは( )内にそれが記されている条の年月を示した。年号は改元の月日にかかわらず元年一月からとした。
- 三 原本と表記が異なるものは、出典の次の㊦に原本のそれを示した。
- 四 注は、「前書」の異同と、他書との異同を示すにとどめた。
- 五 原典は、主として一茶全集本により、『浅黄空』などは一茶叢書本その他によった。また、『八番日記』は風間本により、特に異同がある場合、梅塵本と対照した。

春(承前)

花

入野を出て三里、三島のやしろに拝上す、是大山積のやしろ也

冥加あれや日本の花惣鎮守 (寛政七年)

出典 <sup>(寛政)</sup> 西国紀行 (寛政7・2)

花さくや足の乗物手の奴 (文化五年)

出典 文化句帳 (文化5・2)

花さくや目を縫れたる鳥の鳴 (文化五年)

出典 文化句帳 (文化5・3)

わか鮎は西へ落花は東へ (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・3)

⑩ 全集本発句篇、『文化句帳』と出典を誤る。

花ちるや権現様の御膝元 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・3)

⑩ 七番日記にはこの句の直前に、「山桜咲にけらしな御膝元」「さく花やはづれながらも——」「花さくや日のさし様も——」「咲ごろやさな「が」ら花も——」がある。『文化三―八句日記写』に、上五「ちる花や」。

斯う活て居るも不思議ぞ花の陰 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・3)・文政版発句集・嘉永版発句集

⑩ 七番日記、中七「居るも不思議(議)ぞ」。

花さけや仏法わたるえぞが島 (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・2)・何袋

⑩ 浅黄空・自筆本句集、上五「花咲や」。発句鈔追加、前書「善光寺如来夷岨のしまへ渡りたまふ」、座五「夷岨の島」。

花ちるや一開帳の集め銭 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・11)

② 七番日記には、「平出村彦坂藤兵衛のミダ如来康楽寺に開帳」と前書して、「花咲くや在家のミダも御開帳」に続いてこの句出。上五「花ちる〔や〕」。

花ちるや日の入かたが往生寺 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・3)

③ 中七「日〔の〕入かたが」。七番日記 (文政1・3) に、中七「此日は誰が」としたもので、「散花や長くし日も」としたもので出。浅黄空「散花や月入方が」。自筆本句集、座五「西方寺」。

刈萱堂

花の世は仏の身さへおや子哉 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・3)・だん袋・浅黄空

④ 七番日記、「刈萱堂」と前書して、「子地藏よ御手出し給へ梅の花」に続けてこの句出。自筆本句集、中七「石の仏も」。文政版発句集・嘉永版発句集、中七「地藏ほさつも」。文政1・2希杖宛書簡、「かるかや堂」と前書して、中七以下「仏の身にも親子かな」。

花ちるやとある木陰も開帳仏 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・3)

⑤ おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「三月十七日保科詣」、座五「小開帳」。自筆本句集、上五「花さくや」。

念仏踊

花咲や三味線にのる御念仏 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・12)

山の月花ぬす人をてらし給ふ (文政二年)

出典 八番日記(文政2・1)・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ おらが春、中七「花盗人を」。文政版発句集・嘉永版発句集、中七以下「花盗人を照らし給ふ」。

花ちるや未代無智の凡夫衆 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2)・発句鈔追加

花の陰あかの他人はなかりけり (文政二年)

出典 八番日記(文政2・3)・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集・文政2・2李園宛書簡

㊤ 八番日記、中七「あかぬ他人は」。梅塵本八番日記・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集・李園宛書簡とも、中七「あかの他人は」。

苦の娑婆や花が開けばひらくとて (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)・だん袋・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 八番日記、中七「花が開ケば」。梅塵本八番日記、中七以下「桜が咲ばさいたとて」。

遠山の花に明るし東窓 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・3)

㊤ 文政句帳(6・7)、座五「うしろ窓」。文政句帳(7・1)、中七以下「花の明りやうしろ窓」。浅黄空・自筆本句集、中七以下「花の明りや夜の窓」。

花咲や目につかはれて大和迄 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・8)・自筆本句集

㊤ 八番日記、中七「目につかわれて」。梅塵本八番日記、中七「目に遣はるゝ」。

花見んと致せば下にく／＼哉 (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・9)

㊦ 七番日記 (文化14・4)、「涼まんと出れば下にく／＼哉」。八番日記、この句の次に「何者〔の〕花見や脇よれく」と。

花咲や牛は牛連馬は馬 (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・2)・浅黄空・自筆本句集

花の世や出家士諸商人 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・2)

㊦ 文政句帳、座五「諸あき人」。

花の代や越後下りの本願寺 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・閏1、3)

㊦ 文政句帳 (5・3)、「花の世や田舎もみだの本願寺」「花の世や越後下のほんぐほん寺」。

京迄は一筋道ぞ花見笠 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・9)

二渡し越しての先や花の雲 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・2)

㊦ 文政句帳、中七「越して〔の〕先や」。

花の木に鶏寝るや浅草寺 (文政八年)

出典 文政句帳 (文政8・9)・文政版発句集・嘉永版発句集

あつさりとあさぎ頭巾の花見哉 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・10)

ほくくくと花見に来るはどなたかな (真蹟)

出典 英親(建部巢兆)画讃・俳人真蹟全集(第一卷)に出。

㊟ 志多良、中七「霞んでくるは」。

桜

ばばが餅ぢぢいが桜咲にけり (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・4)

㊟ 文化句帳、「ばゝが餅爺が桜」。発句鈔追加、中七「とゝが桜も」。

証太鼓敲き止ば桜ちる (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・3)

㊟ 文化句帳には、座五「桜哉」とし、その右傍に「ちる」と朱書。中七は「敲〔き〕止〔れ〕ば」。

夜桜や大門出れば翌の事 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・3)

㊟ 七番日記、上五「夜桜〔や〕」。

観音のあらんかぎりは桜かな (文化七年)

出典 七番日記(文化7・1、3)

夕桜蟻も寝所は持にけり (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)

下下に生れて桜桜哉 (文化八年)

出典 我春集(文化8・閏2)・発句題叢・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

㊦ 我春集、「下く」に生れて桜く」。七番日記(8・1)、中七以下「生れて夜もさくら哉」。

笠きるや桜さく日を吉日と (文化十年)

出典 七番日記(文化10・3)・志多良・発句鈔追加

㊦ 志多良、前書「三月十五日庵出なんとして」。

此やうな末世を桜だらけ哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・2)・株番(文化11・2)・ほまち畑(「文化十一年二月吉日」)・文化十一年三月斗圍宛書簡・

随斎筆記・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 希杖本句集、上五「此やうに」。

桜さく大日本ぞく (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

夕暮や下手念仏も桜ちる (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

としよりも嫌ひ給はぬ桜哉 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・7)

㊦ 座五「桜」哉」。

日本は這入口からさくらかな (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・7)

湯も浴て仏をがんで桜かな (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・11)

㊦ 中七「仏(を)おがんで」。

なむくくと桜明りに寝たりけり (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・3)

桜へと見えてじんくばしより哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・9)・八番日記(文政2・1)・おらが春・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集・真

蹟

㊦ 七番日記、中七「見(え)へてじんく」。八番日記・おらが春・自筆本句集・真蹟いづれも中七以下「見(え)へてじんく端折哉」。

一番の弥陀からばつと桜哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

君が代は紺ののれんも桜哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・3)

㊦ 中七「紺(の)のうれんも」。

御報謝と出した柄杓へ桜哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・2)

㊦ 上五「御報射(謝)と」。

さくらくくと唄れし老木哉 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2、3)・おらが春・文政2・2李園宛書簡・文政版発句集・嘉永版発句集



㊦ 書簡、「桜く〜と諷れし」。

田楽のみそにくつつく桜哉 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・3)

㊦ 中七「みそにくつつく」。

御所にて

棒突が腮でをしへる桜かな (をんざくら)

出典 御桜・七番日記(文化12・12の末葉に、「吉野/百尋の雨だれかぶる桜哉」など28句を「寛政元年より文化六年迄」として収める)・浅黄空・自筆本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 御桜、「御所」と前書して、中七「腮でおしゆる」、「御所にて」と前書して、中七以下「腮で教るさくら哉」と重出。七番日記、前書「御所三月三日」、中七「腮でをしゆる」。浅黄空、前書「御所」、「棒〔突〕が腮で教へる桜哉」。自筆本句集、前書なし、中七以下「腮でおしへる桜哉」。(一) 文政版・嘉永版発句集、前書「御所にて」、中七以下「腮でをしへる桜哉」。

桃の花

桃咲くやおくれ年始のとまり客 (寛政六年)

出典 寛政句帳(寛政6・1)

山吹

山吹や神主どのの刀持 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・3)

㊦ 中七「神主どのの」。

山吹に大宮人の薄着哉 (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・2)

根岸

山吹や出湯のけぶりに馴れて咲 (文化四年)

出典 梅塵本八番日記(文政4)

② 中七「出湯のけぶり」。八番日記(文政4・2)、中七「山湯のけぶりに」。八番日記、風間本・梅塵本とも前書なし。

山吹をさし出し貞の垣根哉 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・3)

② 前書「根岸」(井泉水編『一茶俳句集』、この句の前書を誤って「山吹や出湯」の句に付してある)、座五「垣ね哉」。我春集・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「根岸にて」、中七「さし出しさうな」。

山吹や腰にさしたる馬杓子 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・1)

柳

青柳と慥に見たる夜明哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

油火に宵雨かかる柳哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

② 中七「宵雨かゝる」。

青柳の先見ゆるぞや角田川 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

㊦ 中七「先見ゆ〔る〕ぞや」。

石臼に月さしかかる柳哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・1)

㊦ 中七「月さしかゝる」。

下総へ一すじかかる柳哉 (文化八年)

出典 我春集(文化8・1)

㊦ 中七「すじ(ち)かゝる」。

柳からもんぐわとて出る子哉 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・3)

㊦ 七番日記、「もんぐわ」。おらが春、中七「もんぐわあゝと」。自筆本句集、中七「もんぐわあゝと」。発句鈔追加、前書「よりより思ひよせたる小児をも娘の遊び連にもと爰に集ぬ」、中七「もんぐわはとて」。

青柳や梅若どのの御茶の水 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

㊦ 中七「梅若どの」。

ちよんぼりと不二の小脇の柳哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・1)

白猫のやうな柳もお花哉 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2)・嘉永版発句集

⑧ 八番日記・嘉永版発句集、前書「善光寺堂前」、中七「や<sup>(う)</sup>ふな柳も」。おらが春、前書「善光寺堂前」、上五「灰猫の」、座五「お花かな」。

どのやうな下手がさしても柳哉 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・1)

江戸もえどく生へぬきの柳哉 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・4)

⑨ 文政句帳、「江戸もエド<sup>(エ)</sup>く<sup>(エ)</sup>生<sup>(え)</sup>へぬきの」。八番日記(2・2)、「江戸もエド<sup>(エ)</sup>く<sup>(エ)</sup>真中の」。八番日記(2・3)、「エドもエド<sup>(エ)</sup>く<sup>(エ)</sup>真中の」。八番日記(2・12)、「エドもエド<sup>(エ)</sup>く<sup>(エ)</sup>真中の冬ごもり」。梅塵本八番日記(文政2)、「江戸も江戸く<sup>(エ)</sup>真中の」。自筆本句集、「江戸もエド<sup>(エ)</sup>く<sup>(エ)</sup>真中の」。

## 夏

六月

我上も青みな月の月よ哉 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)

⑩ 上五「我上<sup>(エ)</sup>も<sup>(エ)</sup>」。

水無月の空色傘や東山 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・夏)

⑪ 希杖本句集、中七「空色傘よ」。

日 盛

日盛りや葭雀に川の音もなき (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

夏の夜

夏の夜やいく原越る水戸肴 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・4)

夏の夜や二軒して見る草の花 (嘉永版一茶発句集)

出典 稿本発句題叢(文政3)・発句鈔追加・希杖本句集・嘉永版発句集

㊤ 文化句帳(文化4・4)、上五「五月雨や」。

短 夜

大淀や砂り摺舟の明安き (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・2)

明易き鳥の来て鳴榎哉 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・4)

㊤ 上五「明安き」。

短夜の鹿の顔出す垣ね哉 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・4)

短夜やまりのやうなる花の咲 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)

短夜や髪ゆひどのの草の花 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・4)

短夜や草はついでと咲 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・4)

短夜や艸へ弘げる芝肴 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・閏4)

㊟ 一茶全集本、中七「中へ弘げる」と校訂。大久保逸堂・栗生純夫校訂本(資文堂刊)に従う。梅塵本も、中七「草へ弘げる」。

短夜を橋で揃ふや京参り (文政四年)

出典 八番日記(文政4・4)

㊟ 梅塵本八番日記、上五「短夜の」。

暑し

信濃

砂原やあつさにぬかる九十九里 (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

㊟ 前書なし。この句の前書として、「信濃」は落着かない。誤入であろう。

大空の見事に暮る暑哉 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・6)

粟の穂がよい元氣ぞよ暑いぞよ (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・5)

竹縁の鳩に踏まるるあつさ哉 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・6)

㊦ 中七「鳩に踏まるる」。七番日記 (文化13・6)、上五「うす庇」。

落の葉にぽんと穴明く暑哉 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・6)・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

暑き夜を唄で参るや善光寺 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・6)

㊦ 文化13・6に重出、上五「暑夜を」、「暑き夜を」。

青蔓の窓へ貌出す暑哉 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・6)

暑き夜や子に踏せたる足のうら (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・6)

白山の雪さらきらと暑かな (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・6)

㊦ 中七「雪きらく」と。文政句帳 (文政7・6)、「かゞ山の雪てかく」と。

米国の上々吉の暑かな (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・6)

あら暑し今来た山をねて見れば (文政二年)

出典 八番日記(文政2・6)

㊦ おらが春・発句鈔追加、「なお暑し今来た山を寝て見れば」。

暑いぞよ今日も一日遊び雲 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・6)

㊦ 「暑ぞよけふも一日」。

梨柿のむだ実こぼるる暑哉 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・6)

㊦ 中七「むだ実こぼる」。

暑き日や火の見櫓の人の良 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・6)

日蝕の盥にりんと暑哉 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・6)

穀値段どか／＼下るあつさ哉 (文政九年)

出典 文政九・十句帳写(文政9)・希杖本句集

㊦ 嘉永版発句集、「米値段ぐつくと下る」。

しなの路の山が荷になる暑哉 (文政版一茶発句集)

出典 だん袋(文政1)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ だん袋、中七「山が荷ニなる」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「碓氷にて」。

坂本泊



暑き日や胸につかへる白井山 (だん袋)

出典 だん袋(文政1)

暑き日や籠はめられし馬の口 (草津道の記)

出典 草津直の記(文化5・5)

涼し

涼しさや見るほどの物清見がた (寛政7年)

出典 寛政句帳(寛政4)

麻ひたす池小ささよ涼しさよ (享和3年)

出典 享和句帳(享和3・9)

㊦ 中七「池小さくよ」。

夕涼や薬師の見ゆる片小藪 (文化3年)

出典 文化句帳(文化3・6)

涼風や力一ぱいきりぐす (文化7年)

出典 七番日記(文化7・6)

涼風も仏任せの我身かな (文化8年)

出典 七番日記(文化8・6)

㊦ 座五「此身かな」。

四条河原

涼風に月をも添て五文哉 (文化9年)

出典 七番日記(文化9・5、文政1・6)

㊤ 八番日記(文政2・6)・嘉永版発句集、座五「二文哉」。

涼しさや枕程なる門の山 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・4)

下々も下々下々の下国の涼しさよ (文化十年)

出典 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息・嘉永版発句集

㊤ 七番日記、「下くも下くも下々の下国の」。志多良・句稿消息、前書「おく信濃に浴して」、「下くも下くも下々の下国の」。嘉永版発句集、前書「おく信濃に浴して」、「下々も下々下々の下国の」。

大の字に寝て涼しさよ淋しさよ (文化十年)

出典 七番日記(文化10・5)

夕涼や水投つける馬の尻 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・5)

㊤ 七番日記(文政1・6)、上五「涼しさや」。

涼風の曲りくねつて来りけり (文化十二年)

出典 七番日記(12・6)・句稿消息・発句鈔追加・嘉永版発句集

㊤ 七番日記、前書「裏店に住居して」。句稿消息、前書「うら長屋のつきあたりに住て」。発句鈔追加、前書「裏家住居」。嘉永版発句集、前書「裏長屋のつきあたりに住す」。

涼風やあひに相生の蟬の声 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・6)

涼風ややれ西方山極楽寺 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・6)

涼しさや笠へ月代そり落し (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・5)

東本願寺御門迹

涼しやな弥陀成仏の此かたは (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・5)

㊦ 句稿消息、前書「日光祭り御役人付といふもの題に分て二百年忌の真似をしたりし時 東本願寺 菩薩」、上五「花さくや」「涼しさや」と兩様に記す。文政九・十年句帳写、前書なく、「すゞしさやみだ成仏の」。文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集、前書なく、上五「涼しさや」。七番日記 (12・5)、「東本願寺」と前書して、「やよかにも仏の方より時鳥」。

涼しさや湯けぶりそよぐ田がそよぐ (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・4)

あら涼し〜といふもひとり哉 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・3)

㊦ 中七「すゞしといふも」。

涼風の吹く木へ縛る我子哉 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・3、5)・おらが春・文政九・十年句帳写・希杖本句集

㊦ 七番日記、中七「吹木へ縛る」。

我宿といふばかりでも涼しさよ (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・7)

涼しさや朝草刈の腰の笛 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・12)

涼しさにみだ同体のあぐら哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・12)

㊦ 前書「本堂納涼」。希杖本句集、上五「涼しさは」。七番日記(文政1・8)、「本堂」と前書して、中七「釈迦同体の」。

涼しさや外村迄も祈り雨 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・7)

㊦ 前書「雨乞」。

涼しさや笠を帆にして煮売舟 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・8)

㊦ 座五「煮うり舟」。

### 新家賀

涼しさや糊のかはかぬ小行灯 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・5)

㊦ 文政版発句集・嘉永版発句集、前書「新家賀」。梅塵本八番日記、前書「賀新宅」、下五「丸行灯」。

涼しさや手を引あふて迷子札 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・6)

涼しさや里はへぬきの夫婦松 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

涼しさやどこに住でもふじの山。(文政六年)

出典 文政句帳(文政6・2)

涼しさや義経どのの休み松。(文政六年)

出典 文政句帳(文政6・5)

㊤ 中七以下「義経どのの「の」休ミ松」。

涼しさや縁の際なる川手水。(文政六年)

出典 文政句帳(文政6・7)

涼しさの下駄いただくやずいがん寺。(文政七年)

出典 文政句帳(文政7・6)

㊤ 中七「下駄いただくや」。

釣鐘の青いばかりも涼しさよ。(文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

土用

寝心や膝の上なる土用雲。(享和三年)

出典 享和句帳(享和3・6)

鬼と成り仏となるや土用雲。(文化十一年)

出典 七番日記(文化11・5)

うつくしや雲一つなき土用空。(文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

㊦ 文政8・6、同月の条に重出。中七「雲一ツなき」。

梅 雨

入梅晴や佐渡の御金が通る迎 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・6)

㊦ 座五「通るとして」。

五月雨

五月雨や借傘五千五百ばん (寛政七年)

出典 <sup>(寛政)</sup> 西国紀行(寛政7・4)

五月雨や二階住居の艸の花 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・5)

ほつくと二階仕事や五月雨 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・5)

五月雨や二軒して見る艸の花 (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・4)

㊦ 稿本発句題叢(文政3)・発句鈔追加・希杖本句集・嘉永版発句集、上五「夏の夜や」。

五月雨や花を始る小萩原 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)・句稿消息

蓑虫の運の強さよ五月雨 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)・株番・句稿消息

草刈のざくり／＼や五月雨 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・4)

一舟は皆草花ぞ五月雨 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・4)

薺の竹ほしげ也五月雨 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・6)

五月雨や天水桶のかきつばた (文政元年)

出典 七番日記(文政1・5)

五月雨や線香立したばこ盆 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・5、12)

五月雨や肩など打く火吹竹 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・5)

ちさい子が草背負けり五月雨 (しだら)

出典 希杖本句集

夕立

夕立や舟から見たる京の山 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・6)

夕立やそもそも萩の乱れ口 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・6)

㊦ 中七「そもく萩の」。文化句帳同月の条に、中七「げにく萩の」。

夕立や芒刈萱女郎花 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・6)

ござるぞよ戸隠山の御夕立 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・5)

㊦ 七番日記同月の条に、「迹からも又ござるぞよ小夕立」。志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集にも。

夕立や髪結所の鉢の松 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・6)

夕立や裸で乗りしはだか馬 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

㊦ 文政句帳同月の条に連記した「夕立」の句六句中の第六句。

夕立や象潟島甘満寺 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

㊦ 文政句帳同月の条に連記した「夕立」の句六句中の第四句。

夕立や藪の社の十二燈 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

㊦ 文政句帳同月の条に連記した「夕立」の句の第一句。

雲の峰



しづかさや湖水の底の雲のみね (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

川縁ははや月夜也雲の峰 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・5)

㊦ 上五「川縁〔は〕」。

湖に手をさし入て雲の峰 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・6)

片里や米つく先の雲の峰 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・6)

㊦文化句帳 同月の条に、上五「山里や」。

切雲の峰となる迄寝たりけり (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・6)

投出した足の先也雲の峰 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

水およぐ蚤の思ひや雲の峰 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・5)

大の字に寝て見たりけり雲の峰 (文化十三年)

出典 七番日記(文化14・7)

よい程に塔の見へけり雲の峰 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・8)

蟻の道雲の峰よりつゞきけり (文政二年)

出典 八番日記(文政2・6)

㊦ 座五「つゞきけり」。梅塵本八番日記・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集、座五「つゞきけん」。文政九・十年句帳写(文政9)、座五「つゞく哉」。

湖へずり出しけり雲の峰 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・3)・嘉永版発句集

米国や夜もつつ立雲の峰 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

㊦ 中七「夜もつゝ立」。文政句帳(5・6)、中七「夜立さらぬ」。

走り帆の追ひく出るや雲の峰 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・6)

野島や芥を焚く火の雲の峰 (文政九年)

出典 文政九・十句帳写(文政9)・希杖本句集

夏の月

なりどしの隣の梨や夏の月 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・5)

あれ程の中州ありしも此比や (享和三年)

出典 未詳

㊦ 享和句帳(享和3・5)、「夏の月中洲ありしも此比や」「あれ程の中洲跡なし夏の月」。

夏の月二階住居は二階にて (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・5)

㊧ 享和句帳同月の条に、「二階から見る木末迄五月雨」「五月雨や二階住居の草の花」。

一人見る草の花かも夏の月 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・6)

あさぢふや夏の月夜の遠砧 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・4)

象がたや能因どのの夏の月 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)

㊨ 中七「能田どの」。

なぐさみにわらを打也夏の月 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・2、5)・おらが春

㊩ 八番日記、中七「わらをうつ世」。嘉永版発句集、中七「腹を打なり」。

### 青 嵐

青嵐吹くやずらりと植木売 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・4)

### 夏 の 山

夏山や一足つづくに海見ゆる (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・5)

㊦ 中七「二足ふた」。

夏山や京を見る時雨かかる (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・6)

㊦ 座五「雨あめかゝる」。

親の家見へなくなりぬ夏の山 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・6)

㊦ 中七以下「見えへなくなりぬ夏「の」山」。

夏の野

空腹に雷ひびく夏野哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・4)

㊦ 中七「雷かみひびく」。文化句帳(2・6)、「すき腹に風の吹けり雲の峰」。

清水

牛車の迹ゆく関の清水哉 (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4・夏)

賤やしづ賤はた焼の汲め清水 (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4・夏)

㊦ 中七「くはた焼に」。

湧清水浅間のけぶり又見ゆる (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・6)

鶯も鳴きさふらふぞ苔清水 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・6)

⑩ 中七「鳴きさふらふぞ」。

ささら売三八どのの清水哉 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)

⑩ 「ささら売三八どのの」。

なむ大悲くくの清水哉 (文化九年)

出典 句稿消息(文化9)

⑩ 中七「くく」の」。

山本や清水の月の座敷迄 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・3)

⑩ 七番日記(13・5)、中七「清水の月が」。

此入はどなたの庵ぞ苔清水 (文政二年)

出典 おらが春(文政2)

⑩ 八番日記(文政2・2)、中七「西行庵か」。同(2・5)、「此おくへ西行庵か」。

戸隠山

水風呂へ流し込る清水哉 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・5)・おらが春・希杖本句集・発句鈔追加

母馬が番して吞す清水哉 (文政二年)  
 ⑤ おらが春・希杖本句集・発句鈔追加、上五「居風呂へ」。発句鈔追加、前書「戸隠山院内」。

出典 八番日記(文政2・6)・おらが春・発句題叢・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

山里は米をつかする清水哉 (文政六年)  
 ⑥ おらが春・発句題叢・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「小金原」。希杖本句集、前書「小金原にて」。

出典 文政句帳(文政6・7)

⑤ だん袋、中七「米をも搗する」。発句鈔追加、中七「米も搗する」。

夕陰や清水を馬に投つける (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・6)

⑥ 七番日記(文化11・5)、「夕涼や水投つける馬の尻」。

戸隠の家根から落る清水哉 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

青い田

けいこ笛田はことごとく青みけり (文化七年)

出典 七番日記(7・6)・発句題叢嘉・発句鈔追加・嘉永版発句集・文化7・6、長沼の門人某宛書簡

⑥ 中七「田はことごとく」。希杖本句集・発句題叢、「田がことごとく」。

よい風や青田はづれの北の院 (文化十三年)

出典 七番日記(13・6)

白砂の土蔵ぼつちり青田哉 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・7)

焼つりの一夜に直る青田哉 (文政九年)

出典 文政九・十年句帳写(文政10)

⑤ 文政九・十年句帳写に、「柏原大火事、<sup>(閏)</sup>壬六月朔日也」と前書を付して九年の条に収めるが、柏原の大火は文政十年閏六月一日。

祭

古葎祭の風のとどく也 (文化五年)

出典 文化五・六年句日記(文化5・12)

⑥ 座五「とどく也」。

御祭や鬼ゆり姫ゆりはだかゆり (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・6)

⑦ 中七以下「鬼ユリ姫ユリハカタユリ」

葵 祭

かも川にけふは流るる葵かな (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

⑧ 中七「けふは流ると」。

によいと立田舎葵もまつり哉 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

⑨ 上五「によい」と」。

灌 仏

茅場丁薬師

藤棚も今日に逢けり花御堂 (文化五年)

出典 文化句帳(文化5・4)

里の子や鳥も交る花御堂 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・4)

雀子がさくく浴る甘茶哉 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・4)

⑤ 七番日記(文政1・4)、「雀らがさくく浴る」。八番日記(文政2・4)・嘉永版発句集、「雀子も同じく浴る」。

花御堂月も上らせ給ひけり (文政元年)

出典 七番日記(文政1・4)

灌仏の御指の先や暮の月 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・5)・発句鈔追加

白砂の花の卯月の八日哉 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・6)

二三文銭もけしきや花御堂 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

夏 花

袖垣も女めきけり夏花つみ (文化十一年)



出典 七番日記 (文化11・11)

御 祓

うれしさを御祓の宵の天の川 (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・7)

茅の輪や始三度は母の分 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・6)

⑤ 上五「茅の〇や」。

夕さればべんく草も御祓哉 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・6)

一番に乙鳥のくぐるちのわ哉 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・5)

⑥ 中七「乙鳥くぐる」。発句鈔追加、中七「つばめの抜ける」。

蟾どこの這出給ふ御祓哉 (文政三年)

出典 八番日記 (文政3・6)

⑦ 上五「蟾どこの」。発句鈔追加、上五「蟾ども」。

茅の輪かな手引て潜る子があらば (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・6)

端 午

せうぶさす貧者がけぶり目出度さよ (文化八年)

出典 七番日記(文化8・4)

㊤ 上五「ちうぶさす」。

今葺いたあやめにちよいと乙鳥哉 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・5)

㊤ 中七「アヤマにちよいと」。

菖蒲湯

湯上りの尻にべつたりせうぶ哉 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・4)・句稿消息

幟

山嵐家家の幟に起る也 (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

㊤ 中七「家くの幟に」。

藪村の藪の長者の幟哉 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・4)

㊤ 上五「藪村や」。

門の木にくくし付たる幟哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・5)

㊤ 中七「くくし付たる」。

志賀の都は荒にしを幟哉 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・5)

㊤ 「荒〔に〕しを」。

粽

私が引むすんでも粽哉 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・6)

㊤ 梅塵本八番日記(文政3)、中七「おつゝくねても」。

川 狩

川狩のうしろ明りの木立哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・12)

㊤ 発句題叢・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集、中七以下「うしろ明りやむら木立」。

川がりや地蔵のひざの小脇差 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・6)

鶉 飼

草の雨おのが家とや鶉のもどる (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・5)

㊤ 中七「おの〔が〕家とや」。

鶉かがりは木の隔てぞ見るべかり (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・4)

㊤ 「鶉かどり〔は〕木を隔てぞ見〔る〕べかり」。

鶉匠や鶉を遊する草の花 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・4)

世の中を鶉とかたりつつく (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・5)

⑩ 「世」の「中をうとかたりつつく」。

ひいき鶉は又もからみで浮きにけり (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・6)

⑩ 座五「浮にけり」。おらが春・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集、座五「浮みけり」。

雨 乞

ぼろつくや八兵衛どのの祈り雨 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・5)

⑩ 中七「八兵衛どのの」。

汗

御馬の汗さまさする木陰哉 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・10)

⑩ 前書「卷且」。

老の身や一汗入て直に又 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・5)・志多良・句稿消息

⑩ 七番日記、句頭に「樵讚」。志多良、前書「柴売」。句稿消息、前書「柴売画」。